

体調管理人

本作は、m i x i コミュニティ『sugar spot meetingroom.』にて
リレー小説として発表されたものである。

この物語の主人公

大助（25）

彼は旅をしていた。彼の目的はただ一つ。

地球の一番真上に位置する村、『アクアタコス』で家を買ひ、毎日馬に乗って、無邪気な毎日を送ることだった。アクアタコスの風景は唯一無二。たくさんの方がそこに憧れた。だからそれはまさに『取り合い』若者どうしが命を削って戦った。そしてなぜそうなったか。それはこの世から女性という人種が絶滅してしまったからなのだ。だからこそ若者達は戦うことでしか、その欲求をやらせなくなってしまうのだ。もはや地球には間違いなく女性はいなかった。

そして天空の前にも一人の敵があらわれた。ナイフ使いのマフィアだ。

『アクアタコスに行く?』

『ああいくよ!』

『じゃあ死ねよ』

マフィアのナイフが、あっけなく大助を貫いた。大助は力なく倒れた。大助はやがて出血多量で生き絶えた。

『俺はつえーんだよ!』

マフィアが吠える。

しかし決してマフィアが強いわけではなかった。

ではなぜ?

彼の体は病に蝕まれていた。普通の話であれば。それはいたしかたないとされるところ。

だがいたしかたないで本当にすむのだろうか? 予防は? うがいには? 医者には相談は? 睡眠は? 栄養バランス。

闘いだけだけのこの世界だからこそ必要だったんじゃないのか？

どうせやることはいつも一緒だからとあなどった結果がこの末路のこの男の人生をもう一度振り返ってみよう。

時は3年前。

彼の前には油木特選隊が立ちはだかっていた。

『ドンカツ！』

『ラプテン！』

『ゲアキア！』

『ポフ！』

『カラゲア！』

油木特選隊が彼の前に立ちはだかる。そしてまず小柄なポフが大助の前に立ちはだかる。慎重に。慎重に。倒さなければいけない相手だった。しかし大助はまるで野獣のように、彼に噛みつき、見事にポフを食べつくした。そして喉が渴いたと言わんばかりに大好物の炭酸飲料を飲み干す。『かあく！ 美味しい!!』

あまりに大胆な大助の行動に苛立ったプラテンが立ちはだかった。

皆さんにじっくり見てもらいたい。この後の油木特選隊との大助のあまりにも無知なこの闘い方を。そしてなぜ大助がそのような結末を迎えたのかという、今後の彼の行動を。

アクアタコスって、ほんとにあるのかな？

あるさ。

ほんとに？

誰が行ったことが？

さあ。

今となつては、もうどうでもいいか……。

油木特選隊、最後の一人、ドンカツ。

遠のく意識の中、ふと思つた最後のこと。

「大助、もっとよく噛めよ……。」

時刻は AM 7:15

「まさに朝飯前か。」

そう吐き捨て、カバンから携帯電話を取り出す。

キリリと胃の上辺りに痛みが走る。

構わず電話をかける。

「……大助だ。」

3

「さっさと準備しろ。急げ！ あと5分待ってやる1秒でも遅れてみる、殺すぞ。」

ツーツーツ！

「なんだ、夢か。」

急いで支度する。起き抜けのまま黒皮のジャケットを羽織り、黒皮のズボンに足を通すと銃を上着の内ポケットにしまいこみ、猛ダッシュで倉庫を出る。

走る。

走る。

もたつく。

走る。

頭の中ではChemical BrothersのElektrobankがリフレインしている。

〔あくうるせ〜〕

到着。

「すいません」

「…時間がねえ、急げ。」

「ウツス」

黒づくめの男達は、入念に計画された通り、奴らを殺しに行く。

標的は、5人。

まずは1人目。

戦が始まる。

第四章 湯けむり

いや、既に戦いは始まっていた。床が板の間である事に疑問すら感じない、古いお屋敷のよう

な建物で任務は行われていた。

小柄な老人が一人、目の前に横たわっていた。口から白い液体をこぼしながら。右手に持っていた飲みかけの飲むタイプのヨーグルトが床を濡らしていく。

湿気臭いこの場に、乳製品独特の臭いが立ち込める。異臭甚だしい。明日にはチーズだな、と思った頃には2人目の処理が終わっていた。

木目調の高い扉に囲まれた場所から、身を乗り出した形で絶命した白髪の男。口から橙色の液体をこぼしながら。右手に持っていた飲みかけのつぶつぶオレンジジュースが床を占領していく。木目調の高い扉から小さい金属片が豪快に転げ落ち、私の足元辺りまで転がってきた。

その金属片を蹴散らし私は目の前にある、長方形の鍵のついた棚の前に身を潜めた。

ここまでの所要時間わずか2秒。計画されていた事とはいえ、あまりにも完璧すぎる内容に武者震いすら覚える。

棚を盾にしつつ奥を覗くと、錆付いた大きな計りが見えた。針は93kgを指している。今しがた肉の塊となった3人目が計量されていた。

両棲類特有のトーストにバターが溶け出しているような、光沢感のある肉体が、黒づくめの私の姿を映し出しそうなほどだ。

キリリと胃の上辺りに痛みが走る。死体から食べ物を連想するのは良くないと思いながら吐き気を抑える。

口内に少し逆流してきた胃液を吐き出し、次の行動に移す。

盾にしていた棚を背にし、小走りで錆付いた計りの隣にある汚い茶革のソファーに身を寄せ、この部屋を仕切る磨りガラスを視野におさめた。

未だに流れ続けるChemical BrothersのElektrobankの電子音とセッションするように、磨りガラスが勢いよく割れた。

蒸気が部屋中に勢いよく流れ込み全裸の巨漢がうつ伏せで倒れこんできた。クリーム色した肌に破片が刺さり、赤い斑点のように血が滲み出している。蕁麻疹かカビた食パンだ。すっぱい感覚がよみがえってきた事をきっかけに、自分の番が回ってきた事を確認する。

そう、5人目は私が仕留める計画。ここまで計算どおりの12秒。

割れた磨りガラスなめのタイル張りの部屋に、反射した照明がシルエツトを浮かび上がらせる。腰に手を当て、牛乳瓶らしき物を傾けゴクゴクという音を反響させている。湯けむり越しに5人目がいると確信した。

湯けむりが完全にはれない内に上着の右ポケットから、愛銃のトカレフを構え標準を合わせる。小型の割りに殺傷能力のあるこの銃。ちゃんと急所さえ狙えば絶命必死。この黒光りする革の様な手触りの四角いボディ…。

革そのモノの様な四角い小冊子…。

革製の四角い小冊子…。

革製、四角い、小冊子。

失態。

やってしまった。上着の右ポケットから銃と間違え絵日記帳を構えてしまった。
銃は内ポケットにしまったんだ。

しかし、まだ湯けむりがはれていない。もう一度落ち着いて絵日記帳を右ポケットにしまい、銃を内ポケットから出していこう。

ゆっくり動揺をしないようにすれば何の問題も無い事だ。

さあポケットに絵日記帳をお納めしていくぞ。

そーっと。うわっ。

やばい。滑り落ちた。思いのほか飽和水蒸気量がすごくて表面ヌルヌルじゃん。

まずい、絵日記が露呈してる。

うわぁー、へたこいた。

11月19日(月) 曇りときどきチャトウー

今日、僕はようやく例の人物に会えることになった。午前10時、アクアタコス第三更生施設C棟に集合。30分くらい早めに到着したが、案の定、例の人物はまだ来ていない。丁度、10時になってまだ来ないようだったら電話を掛けようと思いつきながら、待っていると、中里さんが来て「今日は無理だよ」と言われ、乗っていた車と一緒に乗せられ、帰宅。また、例の人物には会えなかった。

11月20日(火) チャトウー

今日はチャトウーがすごく、外に出ることも出来なかったので家で音楽を聴きながら、本を読んでいた。「タコス学々タコスタコスにおける傾向と対策」という本で、基本的には誰でも知っているような知識しか書かれていないが、作者の独自の見解が非常にユニークな発想で書かれていて、とても面白い。

11月23日(金) 雨

例の人物から直接電話があった。声はやはりとても高かった。話によると12月のはじめくらい

に会えるという事だったので、3日〜5日のどこかで会うことにした。はやく会いたい。

11月25日(日) 晴れときどきパラスデーノモーリー

黒づくめの男に殺されかけた。トカレフを出そうと思ったら、この日記を出してしまい、やばいかな? と思ったところで、上手くトカレフを出すことが出来て相手を殺すことに成功した。やはり、僕のような職種の人間は一ヶ月に少なくとも一回はこのような事に巻き込まれてしまう。それだけが、大変なんだ。

11月26日(月) 無チャトウ

昼ごろ、中里さんと食事をしようと思かけたが、どこもやっていないと思ったら、案の定月曜日。当然、店はやってるわけが無い。僕も最近曜日の意識があまりなくなってきているが、中里も気付かなかったとは。あまり、人には言える事ではない。

11月27日(火) 晴れときどき曇り

中里さんと食事をしに出かけた。とんかつがいいと中里さんは言ったが、なかなか、美味そうなのとんかつ屋がなかったので、天ぶら屋で穴子天井を食べた。中里さんはミックス天井。話によると、例の人物との会合が12月3日に決定したそうだ。楽しみだ。

12月2日(日) 雨

昨日殺した中里さんの死体を埋めに車で3時間のファミリー牧場まで行って来た。特に変わったことは無かった。明日は例の人物に会える。場合によっては、最後の日記になってしまうかもしれない。

第六章 夢

雨。人気の無い閑散とした商店街を、大助はトボトボと歩いていた。視界に広がる薄暗いモノトーンの風景が、やや落ち込んでいた大助の気分をよりいっそう陰鬱なものにした。雨に濡れて肌に纏わりつく様な感觸の衣類が腹立たしい。

腹立たしいといえばあの男、例の人物だ。大助は、その男に対して全く無知の状態だった。何の情報も持ち合わせてはいない。それがなぜ、自分はあるなに会いたがったのか、男に一体何を期待したのか、男は一体何者だったのか、今になっては知る術も無く、大助にとってはもはやどうでもいい事だった。

午後3時20分、アクアタコス第三更生施設C棟の前に例の人物はいた。決められた時間は午

後3時30分だった。指定された場所に着いた時、大助は少し早すぎたかと思ったが、彼の方は既に来ていた。何ともいえない不思議な気分だった。彼の方は大助の事を知っているかもしれない、だが、大助は彼の事を何一つ知らない。顔や名前はもちろん、その他のありとあらゆる情報は一切無い。そんな状態で、「彼が例の人物だ！」と気づいた、もしくは感じとった自分に、大助は驚きと興奮を隠せなかった。ニヤけそうになる口元を必死で抑えた。

彼までの距離はおよそ20メートル。休日のせいか人はまばらだ。皆白衣を着ている。彼も例外ではない。もしかしたらこの職員なのかと、大助は思った。彼まであと10メートル。まだ大助の存在には気づかない。自分も白衣を着てくるべきだったかと、ふと思った。あと5メートル。

瞬間、まさに一瞬のできごとだった。彼は、大助の方へと振り向いた。その凄まじい早さと速さ、大胆かつ繊細に、寸分の狂いも無く、無駄も無く、意味も無く、それでいて台風のごとき荒々しさで、振り向いたのだ。彼全体から発した激しくも優しい衝撃波が大助の体を襲い、服がズタズタにされたのと同時に、艶かしく、やや湿気を帯びた力強い風圧が、大助を吹き飛ばした。まるで宇宙の誕生を垣間見たような壮大でエモーショナルな快感が体を突き抜け、肉体を構成する細胞分子の一つ一つに激しいエクスポージョンを感じ、自らのあくなき探究心を無限の彼方へ放出せんと脈打つ魂のル・フランから解放たれしエクトプラズムを目に焼き付けて、大助は深い虚無感と共に力尽きた。一瞬の出来事、視認する事さえ困難な、些細でたわいも無い時間。視界に広がる闇、深い、とても深い闇。それさえも、一瞬。

人気の無い閑散とした商店街を、大助はトボトボと歩いていた。見知らぬ土地。雨。擦り切れた心と体。キリリと胃の上辺りに痛みが走る。もはや怒りは萎えた。大助は空を見上げた。土臭い雨が口の中に入る。かまう事無く、大助は空を見上げ続けた。